

## 第 55 回 企業活性化研究分科会・議事録

< 第五五回 2013 年 1 月 27 日 (日) 時間 : 13 : 30 ~ 17 : 30 於 : 専修大学 (神田校舎) >

参加者 : 井端、大野、小林、柴山、菅原、宮川、山本 (7 名)

### 1. テーマ : 『TURNAROUND: RETRENCHMENT AND RECOVERY by D. KEITH ROBBINS and JOHN A. PEARCE II』のまとめ

- ・ 報告者 : 小林宗一郎
- ・ 配布資料 : 4 枚

### 2. テーマ : 『RETRENCHMENT CAUSE OF TURNAROUND OR CONSEQUENCE OF DECLINE BY VINCENT L. BARKER III and MARK A. MONE』のまとめ

- ・ 報告者 : 柴山祥明
- ・ 配布資料 : 3 枚

### 3. テーマ : 急激な信用低下にも対応できる財務分析 — シャープのケース

- ・ 報告者 : 井端和男
- ・ 配布資料 : 10 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告は、シャープ(以下、同社)について分析したものである。本分析の評価法は、第 1 段階で自己資本比率 (30/10 の法則)により財務安全性の評価、第 2 段階で成長性と効率性(粉飾性)により収益性の評価をおこなう。その後、第 1 段階の結果を第 2 段階の結果を用いて再検討する。再検討後の結果で総合的に評価するものである。

同社の分析評価は、まず第 1 段階の財務安全性の評価をおこなった場合、自己資本比率は 20 年度まで 40% 台、23 年度まで 30% 台であったため安全領域であると考えた。くわえて、24 年度末の純資産額は 6,451 億円であり、自己資本比率は 24.7% であるため準安全領域であったと考えている。

次に、第 2 段階の収益性の評価をおこなった場合、同社の直近 4 年間純損益の平均値は  $\Delta 1,200$  億円である。成長性については減収の影響と減収による利益率低下等により  $\Delta 600$  億円と考えられる。また、効率性については純資産回転期間上昇分の 1.38 ヶ月分が含み損と考えれば  $\Delta 2,824$  億円と計算される。第 1 段階の結果を第 2 段階の結果で再検討してみると、純資産額は 1,827 億円、自己資本比率は 7.0% となる。再検討後の評価では、同社はすでに危険領域であると推測している。

したがって、循環過程と見ればまだ安全領域に留まっているが、構造的下降と見ればすでに危険領域に突入したと見るべきであろうと結論づけた。

(文責 : 柴山祥明)